

[49]

氏 名	菅 原 布 寿 史
博士の専攻分野の名称	博士(文化交渉学)
学 位 記 番 号	博第 484 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	動画として見る十二世紀東アジア絵画
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 中 谷 伸 生 副 査 教 授 二 階 堂 善 弘 副 査 教 授 篠 原 啓 方

論 文 内 容 の 要 旨

菅原布寿史氏の博士申請論文の目次は以下の通りである。

序論

はじめに
1. 動画として見る絵画
瞬間と単一固定視点の呪縛
十二世紀のアニメーション
ドリー効果
2. 注視と視線誘導の要因
注視の要因
方向性と視線誘導の要因
イメージの連続性と視線誘導の要因
3. 動勢
本論における動勢の定義
Loran のダイアグラム
4. 俯瞰構図の図学的解釈の問題
視点について
斜投影図法
軸測投影図法
5. クローズアップと平面化
主観性と時空の歪み
まとめ

以上の論文構成に基づいて、以下の主張がなされている。

人は絵画を鑑賞する時に画面全体を茫漠と眺めるだけでなく、部分も注視する。それは画面

内を万遍なく見るのではなく複数の特定箇所を注視することが心理学実験によって実証されている。しかも、そこには注視時間の違いや順序があるという。そして、説話絵巻や物語絵巻のような物語の視覚化という時系列のイメージ表現を旨とする絵画には、鑑賞者の視線を序列に従って誘導しようとしたものがある。そのような絵画の鑑賞からは、注視と眼球運動による時間分析によって、動画のような運動感や時間感覚が生み出される。また、注視されたイメージの連関によってイメージ個々の表象に無い観念が派生する作例も存在する。

第一章では《信貴山縁起絵巻》第一巻〈飛倉の巻〉を対象に、時系列に沿ったイメージの配列（時間分析）がどのような構造で成立しているのかを探る。まず、連続式絵巻である〈飛倉の巻〉の図様を場面ごとに分割する。続いて各場面内の特定部分を鑑賞者に注視させる要因と、次の部分に視線を移動（眼球運動）させる要因を分析し、場面内をどのような順序で走査するよう構成されているかを考察する。こうした要因は画中人物の顔やその向きといった具象的なものと、色や形といった抽象的な造形的特性によるものがあり、両者が複合することによって効果を発揮する。〈飛倉の巻〉各場面を実際に読み解いてゆく。結果として〈飛倉の巻〉には鑑賞者の視点を自在に誘導し、その主観に訴えて心を揺さぶる表現が随所に見られた。客観的なプロットの叙述という素朴な物語の視覚化から脱却した、洗練された劇映画の手法が見いだせた。

第二章は徳川・五島本《源氏物語絵巻》を分析対象とする。その内、屋外描写の〈関屋〉の段を除く 18 図を分析。二分割した画面の両側に主要モチーフを配置することで場面内容を視覚的に明示した「対置的スタティクス」と、動勢の流れが画面を満たし、その構造がドラマティックな演出効果を生み出す「有機的ダイナミクス」の 2 種に大別した。第一章の時間分析の手法はここでも使用されるが、注視と眼球運動を促す図様が運動表現に結びつくことはあまりない。その代わり、視線の走査経路が動勢として一定方向の流れをつくり出し、その複合的な動勢の構造によって生じる二次元空間上の力学が場面の複雑な心理表現を可能としているのである。

第三章では、動く牛の映像を目の当たりにするような李迪《雪中帰牧図》騎牛幅の動的効果の仕組みを、対幅となる牽牛幅と共に解明することを試みた。それは、第一・二章で見たような時間分析ではなく、主要モチーフを中心に画面を見つめることで得られる視覚体験によるものである。まず、明らかに構図理念の異なる両幅を比較対象として俎上に載せるため、本来の形式とされる冊頁画としての牽牛幅の構図を《廓庵十牛図》を参照しつつ想定し、仮定的に〈牽牛図〉として復元した。《雪中帰牧図》の牛の動体表現に影響を与える背景の土坡の線について様々な牧牛図を参照し、その影響関係と変遷を探った。ここでは、宋代から明・清代にかけての牧牛図を「動的な牧牛図」と「静的均衡の牧牛図」に分類。《雪中帰牧図》が属する「動的な牧牛図」では土坡の線を牛の動体表現に利用するのが常道であり、牛のポーズや牛と土坡の線の位置関係のヴァリエーションは「静的均衡の牧牛図」に比べ極めて限られていることが明らかとなった。

第四章では、前提として張擇端《清明上河図》を《雪中帰牧図》と同じ実写の動画映像のような作品と位置づける。しかし、奥行の浅い空間を旨とする後者に対し、前者は現実の三次元の都市空間を移動するような臨場感が真骨頂である。また、《雪中帰牧図》が動体を描いたものであるのに対し、《清明上河図》は視点そのものが動体となる。第四章Ⅰは、その表現効果の解明を目的とする。分析手法は俯瞰角度と視点からの距離という基本的な空間設定、画面各

所に見られる個別の遠近法、建造物の構図法によるもので、それらから導き出される動勢を分析した。

第五章では、素朴な利生記の視覚化に過ぎない光明寺本《当麻曼荼羅縁起絵巻》になぜ豊かな物語性と感動を覚えるのかを、中将姫伝説として物語内容が完備した後年の当麻曼荼羅縁起絵巻を参照しつつ分析した。ここでも、第四章と同じく「視点による基本的な空間設定」・「個別の遠近法」・「建造物の構図法」から動勢が導き出される。そこには、《信貴山縁起絵巻》のような図様の連続性によるアクション展開や場面同士の連関から生まれる観念、徳川・五島本《源氏物語絵巻》のような二次元空間上の動勢によってモチーフ同士の連関が生み出す心理表現、張擇端《清明上河図》のような三次元空間上の動勢による時空の推移表現等、12世紀東アジア絵画の成果が理知的に複合され、豊かな物語的観念を生み出していることが読み取れた。

以上、動画に固有なものとされる運動表現と時間表現が、12世紀の中国では絵画表現として果敢に追求された。それは人の知覚・認知、つまり感覚・主観を基準としたものであるという点で画期的であり、その最も洗練されたかたちとして張擇端《清明上河図》・李迪《雪中帰牧図》が現存する。こうした動画的な中国絵画の手法は、どのような経緯を辿ったかは不明であるものの、日本において物語表現に応用されたと考えられる。その代表例として徳川・五島本《源氏物語絵巻》・《信貴山縁起絵巻》・光明寺本《当麻曼荼羅縁起絵巻》が残る。そこには運動・時間表現だけでなく、描かれた図様の特定箇所のイメージ同士が連関することで感情の強調や物語的観念を創出する劇映画のショット分析（時間分析）の手法さえ見ることができる。この論文は、これら東アジア絵画の持つ動画としての特性を分析可能とする手法を提示している。

論文審査結果の要旨

菅原布寿史氏が今回提出した学位請求論文『動画として見る十二世紀東アジア絵画』は、氏のこれまでの研究成果を集大成した内容で、人間の視覚による認識の問題を、具体的な絵画作品をとりあげて追及した労作である。人間の視覚による認識においては、時間や運動をとらえる感覚と共に、複数の視覚対象が連係して新たな観念が生まれる。こうした視覚体験を再現するものとしてビデオや映画が存在するが、12世紀の東アジアでは、絵画が現代のビデオや映画の役割を担っていたと考えられる。

本論では現実の都市空間を移動する感覚を観者に体験させる張擇端《清明上河図》や、動く映像を目にするかのような李迪《雪中帰牧図》などを考察することで、絵画表現における空間移動などの再現がなされていることを明らかにした。

内容を具体的に検討すると、《信貴山縁起絵巻》第一巻〈飛倉の巻〉については、イメージの配列を物語の叙述として活用しているだけではなく、その複数のイメージの連関からは運動感や衝突感によって感情が強調され、さらには単独イメージに表象されない物語的な観念が派生するよう仕組みられていると主張するが、一定の説得力をもつといえよう。

《清明上河図》と《信貴山縁起絵巻》の動勢の構造から、その共通点と相違点を分析、他の日本絵巻も参照しつつ両者の特徴とその関係を探った。人の知覚・認知様式の純粋な反映であるドキュメンタリー的な前者とその応用ともいえるファンタジー的な後者に直接的影響関係は無いが、異なる図様の背後にある構造には他に類を見ない共通性を見出すことができた。両

作品の影響関係についても若干の見解が示されているが、その点は、むしろ共時性という観点から考察すべきであるという審査委員からの意見が出た。

以上、菅原氏の研究は、従来の美術史的な研究とは異なり、あくまで画像の形式とその鑑賞という立場から書かれた論考である。作品の自立的形式という表層に力を置き過ぎるのではないか、という審査委員の指摘も出たが、徹底した画像分析と、現代における映画の構造を用いて、過去の絵画を分析するという新たな方法論による研究は、一定の評価を与えられるべきであろう。

結論的にいえば、本論文は、絵画表現を映画や知覚心理学の理論を採り入れて、その構造を分析し、その表現効果の原理を読み解くことを目的としている。歴史学的な美術史研究は数多いが、絵画作品自体の構造を徹底的に分析して解明した研究は意外に少ない。その意味で、今回の学位請求論文は、独創的で価値あるものと考えられる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。